

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

学習面で不安やつまずきを感じている生徒への支援として、夏季休業日明けの定期考査の結果を踏まえて、参加生徒を募集し、補習を実施している。1回の講習につき、30分程度の時間とし、「友達との参加を可」、「途中参加・途中退室も可」とするなど、生徒が参加しやすい環境づくりに配慮した。また、生徒の状況に応じて学習面のつまずきに対応できるように、教員の支援体制を整えている。こうした取組により、生徒は安心した雰囲気の中で学習を振り返ることができた。



【取組2】(A中学校)

同じ学園の小学校6年生を対象に「中学校プレ講座」と題し、中学校の授業を体験するイベントを実施している。生徒会の生徒は、学校生活や部活動を紹介する動画を制作し、小学生が中学校での生活を具体的にイメージできるよう工夫している。授業の体験では、有志の生徒が授業に参加し、教員の授業を補助して学習支援や小学生への声掛けを行った。特に、難しい学習内容を小学生に丁寧に教える中学生の様子が多く見られた。中学生にとって、他者の心情を理解する経験となり、小学生にとっても、中学校への進学に安心感をもつことができる機会となっている。さらに、こうした交流を通じて学校全体の一体感が高まり、新たなつながりを築くきっかけになっている。



【取組3】(B中学校)

第1学年の家庭科「食生活」の単元では、献立を作成する知識を学んだ後、実際に献立を作成した。その際に、生徒指導提要で示されている自己決定の場の提供を意識し、個人又はペアで活動するかを選択できるようにした。また、授業内の発表を行う活動も個人又はペアで発表形態を選択できるように配慮している。発表では、自己存在感の感受もできるように、生徒が設定した献立のテーマやレシピを基に全員で投票を行い、選ばれた献立を給食として提供した。

【取組4】(A中学校)

不登校対応巡回教員の研修では、「不登校の未然防止・早期支援」をテーマに行い、社会的自立を目指して取り組むことを共有した。また、生徒一人一人の状況に応じた支援の重要性についても改めて確認し、「登校支援シート」を活用しアセスメントから支援につなげる実践例を紹介した。

多様な学びの場を確保する取組

〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

支援会議（C中学校）

支援会議では、校内別室の運営や教室に入ることができない生徒の対応を学校全体の課題として協議し、支援会議の場で継続的に取組を検討している。特別支援教育コーディネーターの教員を中心に、校内別室の運営ルールや支援方針について見直しが行われ、組織的な支援体制の強化につながっている。

アウトリーチによる支援（B中学校）

学年主任や担任の先生の主導の下、定期的な電話連絡や家庭訪問を行っている。SC 面談時に登校することが難しい生徒に対し、事前に電話連絡を行う等、生徒の状況に応じた支援を実施している。継続的な働き掛けにより、生徒が学校とのつながりを維持できるよう支援している。

校内別室における支援（B中学校）

教員や支援員から生徒に声掛けを行い、校内別室の利用生徒が小学校でのボランティアに参加したり、地域こどもクラブの体験活動に参加したりするなどして、体験活動の充実に努めている。地域の方からの肯定的な声掛けを通じ、成功体験を積み重ね自己肯定感を育む機会となっている。

また、不登校対応巡回教員が校内別室生徒と定期的な面談を行っている。マインドマップを活用し、生徒の自由な発言を可視化しながら、生徒の状況に応じて取り組めそうな課題を整理している。



デジタル機器を活用した支援（C中学校）

不登校対応巡回教員は、不登校生徒が在籍する学級の授業支援ツールに参加している。校内別室への登校を確認し、担任が連絡をとって、次回の登校日の連絡や登校前の朝の連絡等を行っている。さらに、放課後も連絡して支援が途切れないうち配慮を行っている。

関係機関との連携（A中学校）

外国籍の不登校生徒への進学支援として、SSW や地域で在住外国人を支援している団体と連携を図っている。保護者・本人ともに日本語の理解と発話が難しいため、当該団体に依頼し、保護者・本人の困っていることの聞き取りをお願いしたり高校説明会への同行を依頼したりしている。

成 果

教職員に不登校への理解が深まったことで、学校全体で不登校生徒や休みがちな生徒を温かく迎える雰囲気醸成されてきた。こうした取組が生徒の安心感を生んでいる。

課 題

研修の機会や研修内容を充実させ、より一層学校全体で生徒を温かく支援する風土の醸成に努めていく必要がある。